

(2020) 年度国立天文台研究集会開催報告書

2021年 7月 8日

国立天文台長 殿

代表者	氏名	(ふりがな) とみさか こうじ 富阪 幸治
	所属・職	科学研究部 教授
	研究集会名	Symposium on Calendars used in Asia (West-, South-, Southeast-, East-) and Oceania
開催期間	2021年 3月 15日 ~ 2021年 3月 16日	
開催場所	Zoom	
参加人数・国数 (国数は所属機関の国数)	参加人数 40, 参加国数 7	
発表資料等の情報	プログラムは https://www2.nao.ac.jp/~mitsurusoma/program2021a.pdf 集録は後日作成しお知らせします。 研究集会のプログラムや発表資料等をまとめたHPがあればURLを記載してください。 提出後に作成された場合もご連絡ください。国立天文台研究交流委員会HPにリンクを張らせていただきます。HPではなく、論文や冊子を作成している場合は、可能であれば一部ご提供ください。(論文の場合はDOIの情報でも可)	
研究集会の概要	主催: 国立天文台、南山大学人類学研究所 共催: 中部人類学談話会、「新学術領域研究」科研費 講演言語は英語とした。 tennetと談天の会のメールリスト宛に開催を知らせ、プログラムを流した。視聴希望は申し込み制とした。 研究集会の目的は、文明間の暦法の比較である。アジアとオセアニアの地域において行われた、または、行われている、グレゴリオ暦以外の歴史的暦について講演し、議論を行い、交流を深める。異なる暦の起源および暦の地域性が主な討議内容である(地域性は用いる星座の違いにも起因する)。 本シンポジウムは新型コロナウイルス感染予防のため、開催時期を1年延期し、さらにオンラインでの開催とした。	

<p>研究集会の成果</p>	<p>アジアとオセアニア地域において行われた、または、行われている、グレゴリオ暦以外の歴史的暦に関して、それぞれの地域の専門家が講演したことにより、ほかの地域の専門家の理解が深まった。すなわち、地域同士の近縁性、遠隔性が、緯度、それに関係する星・星座の違いに依存することが明らかになった。ほかに地形や環境（海か陸か、平地か山地か）も暦の構造に関係する。現在通用する星座のオリオン、牡牛、プレアデスに相当する星々を使う文化が赤道を挟んで広い経度にわたって存在することがわかった。アメリカ大陸の文明で使われた暦の報告が加わればさらに理解が深まることが予想される。成果は2022年春に出版する予定の南山大学人類学研究所の研究論集としてまとめて掲載することが決まっている。</p> <p>当初のシウポジウム案には中南米の暦の講演が入っていたが、研究集会が1年延期されて、研究者の都合がつかなくなった。残念であった。またZoom研究会では講演したくないという招待者もいた。対面での研究会を開催したいものである。</p>
<p>その他参考となる事項 (希望事項も含む)</p>	<p>当初予定していた研究集会名は「Calendars used in Asia, Micronesia, Oceania, and Mexico」であったが、研究集会が1年延期されて中南米の暦の研究者の都合がつかなくなったことにより、研究集会名を「Symposium on Calendars used in Asia (West-, South-, Southeast-, East-) and Oceania」と変更することとした。</p>
<p>学位取得への寄与 ※1</p>	<p>〔本研究が博士論文執筆に寄与した数〕 〇</p>
<p>参加学生数 ※2</p>	<p>〔本研究に参加した大学院生の数〕 〇</p>